

初期萬葉の論

田 辺 幸 雄

初期萬葉の姿相を具体的に擷もうとする者は、それに先立つ記紀歌謡のあり方を熟視しなければならない。これまでも記紀歌謡から萬葉集への移行は何度となく論じられたし、ほとんどすべての文学史や詩歌史もこの問題に多少はふれてゐる訳であるが、それらの大部分は、大ざっぱにいえば同方向の論であつたといふことができる。即ち、素朴な、若さであらあらしさと同時に持つた、なまの、生活臭にみち溢れた、概括的のいと原初的色彩を多分に持つた記紀歌謡の混沌状態が、次第に整つて来て、我が国古代詩歌のはじめての開花期たる萬葉集に到り著いた、という一本の上昇線を両者の間にひいてみる点に於てそれらは共通してゐるのである。このような見方に対して、敘事詩的な記紀歌謡からその反措定としての抒情詩萬葉が代つて現れたと見る西郷信綱氏の見解（万葉集の形成——文学二五年九月及び日本古代文学史）は、まことに鮮やかな対蹠をなすかに見える。しかしながら具体作品をよく検すると、必ずしもこの両説が鋭く対立するものだともいえないような事情が存しているようであ

る。本稿も自然その問題にふれることになるであらう。

一般にこうした問題が取扱われる時、記紀歌謡も万葉集もそれぞれまとめて一つのものとされるのが普通である。尤も万葉集の方はその内部を三期乃至四期に分けて考へることが既に常識となつてゐるためもあつて、記紀から万葉へという場合それは初期萬葉をさすのだと思ふ人もかなりあるであらう。所が記紀歌謡の方はそうはいかない。万葉以前にさういふ一群のものがあつたという先入主に引きまわされて、いつも一つのものに、一つの混沌に見られてしまふ。元来私自身は文芸の大きな流れを擷むことを比較的不得手とし、細部をほじくることによるこびを覚えつつ今日に至つたものであるが、そのほじくる眼で記紀歌謡を見つめると、到底これを一つのものとして扱う気にはなれない。然し又何期かに分けようとする、直ちに大きな壁にぶつかつてしまふ。記紀歌謡にはいわゆる仮託された歌が多い。本来民謡だつたものが特定の史実に結びつけられ、誰それが何年何月のどういつ時に詠んだ歌だ、とされてしまつてゐるあの事情である。従つて

すべての歌を両書の記載通りに信じてこれを時期区分するの
は八分通り無意味に近い。又仮託された歌とは思えぬもの
についてても、五、六世紀以前のことだとなると、その紀年
をどの程度に信じてよいか、はつきりしたことがわからなく
なる。そういう事情で、これが一つの単純なものでないこと
は分つていながら、さりとて明確な時期区分をもなし難い訳
であるが、ここに一つ可能だと思われるのは、記紀歌謡の初
期（前期）中期はしばらくおいて、その後期或いは末期だけ
を一応立ててみることである。初、前がなくて末、後だけが
あるというのも妙なものであるけれども、初（前）中は存す
ることが明白でありながら霞がこめて居り、後の部分だけが
ほど明瞭に浮き出して来る実情にあるのである。くわいのし
つぽである。まるい実の部分はおからぬまゝに今しばらく放
置し、青い色のはつきりしているしつぽだけを取り出してみ
ようとするのである。もやもやしているものの中から、その
しつぽの見え始めるのは大体どの辺であらうか。

私は顯宗紀元年及び二年の記事に見える、顯宗天皇が老嫗
淡海の置目を歌つた二首の歌をこれにあてたいと思つてい
る。

浅茅原小曾根を過ぎ百伝ふ鐸搖ぐもよ置目来らしも
（*紀八五）*岩波文庫記紀歌謡集の番号

置目もよ淡海の置目明日よりは深山隠りて見えすかもあ
らむ （紀八六）

曾て功績のあつた老嫗が老いさらばうて繩につかまりながら
鈴の音と共に参内するのを、又それが勤めに堪えずして故郷
に還つてゆくのを、愛惜した箇処に出てくる歌であるが、置
目という固有名詞の使われざまや特殊な内容からみて、これ
が仮託の歌でないことはほど確かであらう。而も古事記にも
これが同じ顯宗天皇の時の置目に關する歌として二つながら
（前歌の第二句が「小谷を過ぎて」となり、第四句末端の「も」
がないという小差はあるが）出ていることは、この歌の伝誦
の確かさを示すことにもなる。そして古事記の歌謡の最後
（記事は推古朝までであるが）のものとなつていゝことも一つ
の区切りを考えさせる。これ以後は日本書紀の歌のみになる
が、大体素性のわかつてゐる歌が大部分で、ここ以前の混沌
状態とははつきり区別されるといつてよい。

さて顯宗天皇元年は四八五年である。この記事が事実を録
したものであつたとしても、四八五年をそのまゝ受取つてよ
いかどうかは問題であらう。然しこれがいくらか後に下げら
れてもよい。言いたい所は、この時が有名な倭王武の上表文
が出された四七八年の少しく後に當つてゐる点である。……
昔より祖彌みづから甲冑を撰ぎ、山川を跋涉して寧処するに
違あらず。東のかた毛人を征すること五十五国。西のかた衆
夷を服すること六十六国。……」の文章を以て名高いこの上
表文が我が国五世紀頃の国内統一の成功、いわゆる英雄時代の
終結等を語つてゐることは、今まで幾度となく述べられた

が、そうした状態の後を受けた頃の、一応国内統一が果され、皇室の基礎が確立した後の物語であることは、この際反省されてよい。そういう平和時のゆとりのある話の中から生まれられた歌であることも、両歌の信用度を幾分増すであろう。この所を記紀歌謡後期（或いは末期）の起点とし、天智紀十年の「み吉野の吉野の鮎……」（紀一二六）及び一二七・一二八の三首を最後とするのが私の案である。

この期をたてると、記紀歌謡から万葉への移りはより狭められて、記紀歌謡後期から万葉集初期（或いは第一期）への移りということになる。所が初期万葉とは一体いつの時代の歌か。磐姫皇后仁徳天皇の妹等の歌はそれぞれの歌柄から見て後の作品らしいことはまず動かない。雄略天皇の歌（一）はいかにも古格を保つけれども、同時代作品が殆どなくて、時代の確実さが少々危いように見える。以上は顯宗紀以前に当るが、疑わしいからひとまず除くと、次は聖徳太子、舒明天皇となり、この辺からほど確実となつて、斉明天皇、有間皇子、天智天皇……と第一期作者の連名が始まるのである。そして万葉第一期の最後尾は壬申の乱（六七二年）に置かれるのであるから、「吉野の鮎」以下三首の童謡が行われたのと時を同じくする。結局私の言う記紀歌謡後期はその大部分を万葉第一期と重ならせている訳になる。こゝに於てその重なるの實際の姿を、そのきしみ合う所を見究めるのが、初期万葉の特性を析出する好個の手段ともなり、又記紀から万葉

への推移を具体的に跡づける所以にもなるかと思う。

記紀歌謡後期に属する作品は、記紀に重出するものを一回に数えて四三首である（岩波文庫記紀歌謡集によれば四四首となるが、私は紀一二〇と一二一とは合せて一首と見るべきだと考える）。この四三首中紀一二二の童謡が難解でその意図する所が何であるか全くわからないが、他の歌は大体左の如く類別し得られる。

敘事詩的傾向の歌

(A) 枚方ゆ笛吹き上る近江のや毛野の若子い笛吹き上る（紀九八）及び一〇〇・一〇一・一〇五・一一一以下

「紀一は略する。

韓国を如何に言ふことぞ目頼子来到的 向避くる志岐の濟を

目頼子来到的（九九）及び八五・一〇四

事件に関する歌、譚歌とでも称すべきものである。中に毛野の若子、目頼子、大葉子等主人公の名が出て来るのが普通で、譬喩を用いず直説法でゆく。右側の例は事件の外側から歌われ、左側のはもつと近い所から歌われているが、根本的には相通じるものを持つているといつてよい。

(B) やすみしし わが大君の 隠り坐す 天の八十光 出で立たす 御空を見れば 万代に斯くしもがも……

(一〇二) 及び一〇三

讚歌で、皇室及び蘇我氏の尊さや繁榮ぶりが讚嘆されてい

る。そういう歌の生まれるまでに強盛となつた皇室や蘇我氏の
の當時に於ける發展を思ふべきである。

(C) 隠り国の 泊瀬の川ゆ 流れ来る竹の いくみ竹
吉竹 本辺をば…… (九七) 及び九四・九五

書紀には安閑天皇の求愛歌に和えた長歌として記されている
が、守部が喝破したように、本来挽歌である。九四・九五と
共に、後述の抒情的挽歌と異なる古い行き方をとつてゐる。

(D) 岩の上に小猿米焼く米だにもたげて通らせ山羊の老
翁 (一〇七) 及び一〇六・一〇九・一一五・一二五・一二六・
一二七・一二八

これらの大方は童謡と記されている。第三者乃至その事件の
批判者たる国民の声の代表者が、譬喩によつて事件を諷刺
し、国民の意のある所を爆発させる、という政治色豊かな存
在である。

(E) 打橋の 集衆の遊びに 出でませ子玉代の家の
八重子の刀自 出でましめ 悔はあらじぞ 出でませ子
玉代の家の 八重子の刀自 (一二四)

之も童謡と記されているものだが、何を譬えたものかわから
ない。或いは全然別個な童謡の如きものではないかと考えら
れる。

(F) 潮瀬の波折を見れば遊び来る鮎が鱗手に端立てり見
ゆ (八七) 及び八八―九三

歌垣に於て、武烈天皇と鮎の巨との間にうたわれた贈答歌で

あるが、内容が戀愛鬭争そのものを真正面からふりかぶつて
いる点、相聞歌一般とは遙かに異り、近世の相当狂言の渡り
台詞等に類似するものである。歌うことが即ち鬭うことであ
る所に歌垣の歌としての独自の特色がある。

(G) 八島国 婿求けかねて 春日を 春日の国に 麗し
女を 在りと聞きて…… (九六)

八千矛の神が沼河比売を求婚する歌と同系統のもので、当時
広く民間に行渡つた類型歌の一つであつたらしい。

(H) 彼方の浅野の舞響さす我は寝しかど人ぞ響す
(一一〇)

小林に我を引き入れてせし人の面も知らず家も知らずも
(一一一) 及び一〇八

これらの歌はその所伝から切り離して、草深い田舎の、下層
民の戀——というよりはもつと直接的な野合の歌と見るべき
である。こゝにはむせるような体臭はあるが、抒情精神はま
だ生まれていない。これらの歌は入鹿の事件などに仮託され
て初めて書紀に載ることができたのである。

抒情詩的傾向の歌
(I) 置目も淡海の置目明日よりは深山隠りて見えずか
もあらむ (八六)

離別の抒情歌。上述の如き、国家の一応安定した後はこの歌
の生まれて来た事情は、抒情詩の成立條件というものを深く
考えさせる。

(J) 今城いまきなる小丘こむねが上に雲くもだにも著しくし立たば何か嘆かむ
(一・二六) 及び一・三・一・二四・一・一七・一・一八・一・一九
二一〇——二二一・二二三

すべて換歌といつてよい性質の歌であるが、(C)とその詠出態度が根本的に違うことは自明である。抒情精神は(I)よりも洗練されたものとなり、万葉の中に置かれてもその区別を容易に知り難い程よく整つたものになつてゐる。

右のように類別してみても気附かれるのは、抒情詩的なものの少さである。又その抒情詩が離別と挽歌という特殊なものに限られてゐる事情である。時代の若さと共に、むしろそれ以上に記紀両書の書物としての性質が思われる。

万葉の世界に眼を転ずる。壬申の乱以前の初期万葉は、未だ百花繚乱とまではゆかぬ初々しさを湛たへてゐるが、今これに記紀歌謡後期を類別したのと同じ規矩を用いてみることにする。

(A) 家ならば妹が手纏たまかむ草枕旅くさまくらに臥ふせるこの旅人あはれ
(四一五、聖德太子)

(A)の左側のものに相当する。一〇四の異伝歌と称すべきもので、聖德太子の子慈悲譚を背後に負うてゐる。他にこの(A)に該当するものは見当らなう。

(B) 大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山
登り立ち 国見をすれば……(二、舒明天皇)

やすみしし わが大王の 朝には とり撫でたまひ 夕
には いより立たしし……(三、中皇命) 及び四・一四七等
その讚美される対象が国土であつたり、天皇であつたりはするが、等しく榮えるもの、權威に裏づけられて颯爽たるものを祝福し、その光榮の久しからんことを祈つてゐる。(B)と同質で、次第に洗練されたものを持つようになつて來てゐる。

(C) 八隅やぐもしし わご大王の かしこきや 御陵みはつかみ奉ふる
山科の 鏡の山に……(一五五、額田王) 及び一四八

初期万葉の挽歌の大部分は(J)系のものであるが、この二首は古い系列に立つ。そしてこのゆき方が第二期に至り、人麻呂によつて復活され、甚だ莊重な姿に生まれ變るのである。

(D) (E) (F)に相当するものは、見当らなう。見当らないことの重大さは後で考えることにする。

(G) 籠かごもよ み籠みかごもち ふぐしもよ みふぐし持ち
の岳たけに 菜摘なとます兒……(二)

雄略天皇御製ということが若し、確實だとしたら、紀九六の安閑天皇御製より三十数年以上古いことになる。この歌が記紀歌謡後期作品一般よりも古そうに見えることは誰の目にも同じであるらしい。ここにも日本全土の国主としての君主の歴史の若さが反映してゐるようである。

順序を變える。(I)は内容がやゝ特殊で、初期万葉では

該当例がないようである。

(J) かからむとかねて知りせば大御舟泊てしとまりに標しるし結はましを (一五一、額田王) 及び一四九・一五〇・一五二・一五三・一五四

(J) と全く同傾向であり、かえつて (J) の方に抒情精神のより澄徹したのを見得るような事情もある。全く同質の抒情詩的詩歌が両方の側に存していることは、この挽歌の條項でよく納得しておく必要がある。

(H) あかねさす紫野ゆき標野行き野守は見ずや君が袖振る (二〇、額田王)

随意にこの一首を引出してみても、記紀の (H) との相違があまりにも甚だしいのに一驚する。記紀では仮託の衣を着せられることなしには、この類の採録は為されなかつた。この條項に来ると、前條までとは比較にならぬ程の多数の例歌を初期万葉から拾い出すことができる。いつてみるならばそれは相聞歌の確立である。そのことを可能にした万葉集の歌書としての性質が、政治書たる記紀に対して考えられ、又皇室中心の初期万葉の作者群に於て、戀愛というものが單なる官能の喜びや動物的な野合への関心から離れて精神的なものへ移行している事情を読み取ることができる。又、漠たる両性間の吸引という状態から脱して、特定の異性に対して発する咏嘆となつてゐる点も見逃し難い。

秋山の樹の下がくり逝く水の吾こそ増さめ御念ひよりは

(九二、鏡女王)

水薦ける信濃の真吾吾が引かばうま人さびて否と言はむかも (九六、久米禪師)

一々取り出して論ずる余裕がないが、この條項に属する諸歌が、豊富な角度から戀愛の種々相を歌い、抒情詩的要素を豊かに含みつつ、中には九二のように、既に智巧的な方向に傾いているものをさえ含むことは明白である。ここに至つて記紀歌謡との相違ははつきり照らし出される。新しい天地の開かれてきたことを感ぜしめる。

以上、記紀歌謡後期の諸歌を類別した標準で初期万葉を眺めた結果が出た訳だが、この標準にあつてはまらぬもの、即ち記紀になくて万葉から顯著になるものが二つある。その一は鞆旅歌、他は自然観照歌である。

實質上の鞆旅歌は記紀歌謡にも混在している。しかしほか他の役目を負わされて居り、それ自身として咏嘆されているものは一つもない。所が万葉では

熱田津にきたづに船乗りせむと月待てば潮も適ひぬ今は漕ぎ出でな (八、額田王)

山越の風を時じみ寝る夜おちず家なる妹をかけて慕しのびつ (六、軍王)

のような旅そのものの進行を、又旅先での望郷心をうたうものは初期にもかなり多く、或いは住みなれた地を離れるに當つてその地の山を熱い思いにふり返り (一七・一八)、或いは

野宿の営みをありのまゝに歌う（一一）等旅という平素と異なる生活の与える感動が多く、秀歌を發せしめてゐる。有間皇子の二首の歌（一四一・一四二）や天智天皇の耳我の嶺の歌（二五）が深い感銘を与えるのも、それが悲劇を背負つた旅に於て、或いはその旅を回想したという事情に於て發せられてゐるからである。

渡津海の豊旗雲に入日さし今宵の月夜清明こそ（二五、天智天皇）

この歌にはこれ以前に全くなかつたものがある。雲や月がたとへはつきりした自覺はなかつたかも知れないにせよ、とにかく美しいものとして表され、期待されている。更に天智天皇が春山万花の艶、秋山千葉の彩を競わしめた時、額田王が判定を下した長歌（一六）になれば、この自然觀照意識は明確な形をとつてゐるといつてよい。このような歌が近江朝の側から生じてゐることは偶然ではなさそうである。懷風藻の序文に記されてゐるように天智天皇中心の宮廷には盛に漢詩の製作が行われている。大陸詩人の好尚に引ずられて自然美への眼がこの人たちにひらけて来たらしい。

以下結語に入る。記紀の（D）（E）（F）が初期万葉に姿を見せぬことは、同じ時代に於て、政治書としての記紀が重視したこれらの類を、詩歌の集成書たる万葉集が等閑に附したためであるが、他面それは芸術意識に関する問題でもあ

る。鬪争的な歌壇の歌や政治色豊かな民の声としての童謡等は、万葉集やそれに先立つ類聚歌林その他の歌集の編者にとつて、素朴すぎるものに思われたのであろう。（A）（B）（C）（J）ではほぼ同質のものを両者に見出すことができ。記紀歌謡から万葉へ一つのもの流れているという一般の見解はこれらの條項については確に裏附けを得るのであり且つ（J）の挽歌に於てかういうものが記紀の中で既に清楚なものを獲てゐる点は十分注意されてよい。記紀と通ずる素朴な味がこれら五條項の作品に流れ、初期万葉らしい印象を与えてゐる。これに對し新たに生じた相聞歌、羈旅歌、自然觀照歌は、すべて第二期に至つてその頂点を形作るのであるが、創生後間もない若さが幼い姿でその方向をまさぐつてゐる所から一種の初々しさが發して、特殊な魅力をこれらの諸歌に賦与してゐる。黄色味の勝つた若草のやわらかい色合である。初期万葉の魅力は主としてここにあり、これに次いで前條の、記紀と通ずるものを持つた部分に存する。といつて差支えない。

若く素直でかけりがなく、ナイーヴなふくよかさに縁取られてゐるが、どこか突込みが少しく足りず凝集力が弱い。その足りず、且つ弱い所が却つて完成期の歌に求められぬ佳味となつて、飛鳥伝の温雅な表情を連想させる、初期万葉諸歌の不可思議な魅力、それは今後更に追求されてしかるべきである。当時の社会状態との関連、個々の作家の問題等々、幾多の重要課題が紙數の外にはみ出してしまつた。それらは次の機会に譲つて、一まず筆をおくことにする。